

Dickens による *Every Man in His Humour* の上演

西條 隆雄

『甲南英文学』No.30 抜刷

2015年7月11日発行

甲南英文学会

## Dickens による *Every Man in His Humour* の上演

西條隆雄

### 1. 唐突な企画とその成功

1842 年 1 月、Dickens はアメリカに渡る船上で Earl of Mulgrave (George Constantine Phipps, 1818-1890) より、モンリオール駐屯部隊士官が組織する素人劇団を率いて 5 月に慈善公演を演出してくれないかとの依頼を受けた (*Letters* 3:13n)。彼は即座に引き受けると、うちつづく忙しい歓迎集会の合間を縫って戯曲の選定、3 本立てプログラムの作成、舞台・衣装・演技の指導、およびリハーサル、本番にいたるまですべてを一手に引き受け、5 月の中・下旬はすべてモンリオールに滞在して劇団の訓練・指導につとめた。そして月末には自らも 3 本立てプログラムのすべてで役を演じつつ、500~600 人の観客を前に公演し、大成功を収めた。その興奮と自負に支えられ、彼はいつか英国において自分の率いる素人劇団を結成したいと考える。その念願は、3 年後、驚くべき速さで実現する。

1845 年 7 月、Dickens は 1 年間のイタリア滞在から帰国するとすぐさま素人劇団結成に踏み切り、2 ヶ月後の 9 月 20 日には、その初企画として、Ben Jonson の *Every Man in His Humour* を上演する。帰国するなり数人の友人に手紙を出し、その返事を確かめもしないでまずソ

ホー地区にある Miss Kelly's Theatre を予約し、配役はそれから考えるという、一見信じがたい行動をとる。だが、彼はかつて民法博士会館に勤めていたとき (1828-32)、仕事を終えると毎日きまって芝居を見に行き、殊に役者が Charles Mathews (1776-1836) である場合は絶対に見逃さず、帰宅してからも 4~6 時間そのままをし続けていた (Forster 380)。だから彼には優に 1,000 点を下回らない観劇の記憶が鮮明に焼きついていて、それを自在に引き出すことができるのだ。また舞台・衣装・演技の指示、指導、助言ときはプロの舞台監督にも引けはとらない。当時の大俳優 William Macready (1793-1873) も、Dickens は素人役者の中で心に残る二人のうちの一だど賞賛するほどである (Pollock I:112)。普通の人間であれば、上記のような、賭けにも等しい企画には踏み出せないが、彼は思いつくとすぐ行動に移す。そして不思議なことにその行動は必ず成功をもたらすのである。

上演日時と劇場を定めると、短時日の間に配役、振りつけ、リハーサル日程を終える。これは以後の演劇活動において典型的に見られる行動パターンであるが、初回も例外ではない。配役がすべて決まってもいないのに、上演のイメージ、舞台、演出、段取りは明確に出来上がっているのである。そして、いざリハーサルが始まり本番が近づくと、シャツの袖をまくり、汗だくになって、舞台を修理し、衣装をそろえ、セットを作り、せりふや出退場を指揮し、招待状を書き、プログラムを作成し、椅子席に番号札を貼る。彼は非凡な役者であるとともに、卓抜した舞台監督・演出家でもあった。

当日は、チャッツワースから 200 マイルの道のりを馬車で駆けつけた演劇界の大パトロン Duke of Devonshire をはじめ多くの貴顕淑女を

観客に迎えて、企画は大成功を収める (*Letters* 4: 388n)。“Strictly Private”と明記し、上演する人々が各々30名を招待して演じる形をとったので、観客は600~700人にかぎられた。ところがこれを観ることのできなかった人々から公演にしてほしいとの要望が湧き起こった。そこで2回目は11月の中旬、劇場は前回より多くの観客を収容できる St. James’s Theatre を選び、興行目的も医者であり公衆衛生改革者である Dr. Thomas Southwood Smith (1788-1861) の療養施設建設基金を集めるための慈善興業としてこれを上演することにした。この療養施設は、Dr. Smith が1842年4月、Devonshire House 地区に開設した「サナトリウム」で、この年に3年契約のリースが切れるので新たに施設を建設するための募金を必要としていた。故郷を遠く離れてロンドンで働く人々が、病にかかっても十分な医療を受けることができないのを見て、そうした貧しい人たちに手をさしのべるために Dr. Smith が開いた医療施設である。サナトリウムといえば結核療養施設を想像するかも知れないが、そうではない。そのサナトリウムの会長には Prince Albert (1842.11.22 就任) が就いていて、公は是非とも慈善公演を見たいので都合のつく11月15日に設定してほしいとの書簡を、寄付金を添えて送ってきた。そこで公演はその日に定められた (*Cf.* CD’s letter to Stanfield, 26 October 1845)。この日もまた Prince Albert、Duke of Devonshire、Duke of Wellington をはじめ、きらびやかな貴顕の数々が観客席を飾った (Johnson 571-2)。

以上の2回の上演を含めて、*Every Man in His Humour* は全部で9回、うち3回はリットン卿の城館の大広間 (a great hall) において私的に上演された (遊び心を入れてか、プログラムには Theatre Royal,

Knebnorth と記している [Dexter 1940: 90]。その折は、数マイル内の名士たちによってどの席も埋め尽くされたという (Adrian 126)。また、マンチェスターとリヴァプールでは、観客数は 2,000 人を超え、経費を差し引いても £ 440 12s、£ 463 8s. 6d. が慈善目的に寄贈された (*Letters* 5:144n; Forster 457-58)。公演は数回に過ぎなかったにもかかわらず、また、素人劇をとりあげることのない『タイムズ紙』や『イラストレイテッド・ロンドンニュース紙』もこれを紙上で好意的に論評し (*Times*, 22 September 1845; *ILN*, 22 & 29 November 1845)、ディケンズは 250 年前に書かれた *Every Man in His Humour* を 19 世紀に大々的に復活させた人として演劇史に名をとどめている (Watson xxii-xxiii)。ちなみにその 9 回の上演プログラムは以下の通りである。

1845	Sept.20 (Strictly Private)		
	Ben Jonson	<i>Every Man in His Humour</i>	Comedy
	Catherine Gore	<i>A Good Night's Rest</i>	Farce
	Nov.15 (St. James's Theatre; in aid for Dr. Southwood Smith's Sanatorium)		
	Ben Jonson	<i>Every Man in His Humour</i>	Comedy
	Catherine Gore	<i>A Good Night's Rest</i>	Farce
1847 (for the benefit of Leigh Hunt)	July 26 (Theatre Royal, Manchester)		
	Ben Jonson	<i>Every Man in His Humour</i>	Comedy
	Catherine Gore	<i>A Good Night's Rest</i>	Farce
	John Poole	<i>Turning the Tables</i>	Interlude
	July 28 (Theatre Royal, Liverpool)		
	Ben Jonson	<i>Every Man in His Humour</i>	Comedy
	John Poole	<i>Turning the Tables</i>	Interlude
	Richard Peake	<i>Comfortable Lodgings; or, Paris in 1750</i>	Farce
1848 (Funds for the Curatorship of Shakespeare's Birthplace)	May 17 (Theatre Royal, Haymarket)		
	Ben Jonson	<i>Every Man in His Humour</i>	Comedy
	James Kenny	<i>Love, Law, and Physic</i>	Farce
	June 6 (Theatre Royal, Birmingham)		
	Ben Jonson	<i>Every Man in His Humour</i>	Comedy
	Elizabeth Inchbald	<i>Animal Magnetism</i>	Farce
1850	Nov.18 (privately performed at Theatre Royal, Knebnorth)		
	Ben Jonson	<i>Every Man in His Humour</i>	Comedy
	Elizabeth Inchbald	<i>Animal Magnetism</i>	Farce
	Nov.19, 20 (privately performed at Theatre Royal, Knebnorth)		
	Ben Jonson	<i>Every Man in His Humour</i>	Comedy
	John Poole	<i>Turning the Tables</i>	Interlude

## 2. なぜ Jonson の喜劇であったか

Dickens は素人演劇活動の開始に当たって、なぜ *Every Man in His Humour* を選んだのであろうか。1598 年に初演 (at the Curtain Theatre in Shoreditch) された Jonson の新作は、実はシェイクスピアが推挙し自ら登場人物の一人となって演じたからこそ歴史に残ったものの、そうでなければ脚本は消滅していたかもしれなかった。さしたるプロットもなく、どちらかといえば多くのサブプロットが寄り集まっているだけのように思われる作品で、何らかのテーマが展開するとか、共感を呼ぶストーリーが生成発展するということもなく、観客の心を掴むにはほど遠い。加えて Jonson 劇は 19 世紀には、“bawdiness”, “impiety”, “pedantry”, “obsolete language” の非難にさらされて、ほとんど演じられていなかったのである (E. J. Jensen 24-5)。

上演の理由として John Forster は “We had chosen it, with special regard to the singleness and individuality of the ‘humours’ portrayed in it,” (Forster 382) と述べ、Michael Slater は “probably because it offers a whole range of character-parts giving nearly every cast member a chance to shine” (Slater 237) と、もっともな理由を挙げている。しかし Edgar Johnson はこの喜劇の根本的な弱点をとらえ、Dickens 自身、愛想を尽かしているかのように、そのリハーサル風景を叙している。

As rehearsals continued, Dickens developed a low opinion of both the play and his fellow actors. “It is such a damned thing,” he wrote Macready, “to have all the people perpetually coming on to say their

parts, without any action to bring 'em in, or take 'em out, or keep 'em going." And most of the players were "an utterly careless and unbusiness-like set of dogs"; "I don't except Forster: for so far as he is concerned, there is nothing in the world but Kitley—there is no world at all; only a something in its place that begins with a 'K' and ends with a 'Y.'" (Johnson 570; *Letters* 4: 383)

各人がてんでんバラバラで、Forster も自分の Kitley 役だけしか念頭にないという。Jonson はラテン劇の三一致を守りつつ当時の生活・風俗を描いたものの、主眼は中・下層の人々の気取り、おろかさを暴くところにおかれていて、演劇の面白さが感じられないというのだ。

そこで *Every Man in His Humour* の上演史に目を通してみた。王政復古期の上演記録はほとんどない。Thomas Killigrew (1612-1683) が 1663 年 5 月 7 日に Drury Lane の経営を任されたとき、この喜劇が一座に割り振られたらしい。主要演目とはいえないものの、時折上演され、うまく演じられた場合は、観客のうけもよかったと述べている (Noyes 247)。しかし、Dryden は diction が気に入らず、表現が低劣だという。総じて観客の心をつかむ芝居ではなかったようだ。そこでこの喜劇の上演リスト (Noyes 319-333) に目を通したところ、上演はまったくといってよいほど記録されておらず、1725 年 1 月 11, 12, 13 日 (at Lincoln's Inn Fields) に John Rich (1682-1761) が登場人物を 7 名削り新たに 3 名を追加する大幅な改作をほどこして上演した記録が載っているだけである。当時は論評などほとんど書かれておらず、上演の様子はよくわからない。そして以後 26 年間にわたって上演の記録は

見当たらない。それが、1751 年からほぼ半世紀にわたり、途切れることなく勅許劇場の上演記録に載りつづけるのである。

それを成し遂げ、この喜劇を大々的に復活させたのは David Garrick (1717-79)であった。彼が Drury Lane の共同経営者になったのは 1747 年、若干 34 歳のときで、すでに彼は大俳優として名を馳せていた。彼は、さまざまな苦勞と戦いながら Drury Lane に観客を呼び戻す努力を重ねる一方で、古い脚本を復活させてレパートリーに加えることにも意を注いだ。その手始めとして選んだのが Ben Jonson の *Every Man in His Humour* であった。すでに John Rich が復活を試みたことを知ってはいたが、さすがの彼にも、1 世紀半にわたって成功を見ない芝居を復活させるのは大きな冒険であった。というのも、この喜劇は、wit は単刀直入、humour は粗野であらうべく、プロットらしいものではなく、観客の興味をひきつけるストーリーも展開されないからだ。それに登場人物は男性が 13 名、女性が 3 名、しかもそれぞれ癖のある人物なので完璧な人選をした上に、しっかり役割を指導しなければ成功はおぼつかない。彼は 3 年にわたって作品を研究し、不評を招きそうな要因はことごとく取り除き、魅力に欠けるところは加筆によって補い、18 世紀観客の好みと品性に合致するように作品に改変の手を加えた。その結果、Jonson の喜劇は劇的な復活を遂げ、初演から “The play took the fancy of the town by storm.” (Noyes 256) と大好評を博し、Drury Lane では Garrick が引退するまでこれがレパートリーのひとつとなり、さらには彼の引退後も Covent Garden が引き続いてこれを上演している。1751 年から 1825 年までの間、この喜劇はイギリスの演劇界に大きな旋風を巻き起こした。Jonson 喜劇の復活はまさしく

Garrick の大きな功績の一つであったろう。

以上を知って私は急ぎ Dickens の書簡集を調べた。すると Dickens が用いたのは Garrick 版であることがわかった (*Letters* 4:332n)。多分 Oxford 版か Yale Ben Jonson 版と同じであろうと考えてテキストの入力を終えていたが、いざ Garrick 版を使ったとなると、果たしてそれが手に入るかどうか、不安に駆られた。しかし調べてゆくうちに不安は杞憂に終わった。Readex 社刊行の『19 世紀戯曲集』(マイクロフィッシュ版)には、Jonson 名ではなく Garrick 名で *Every Man in His Humour* [Garrick 版] が収録されていた (John Dicks' *British Drama Illustrated*, 4 [1864-1872]より収録)。また、それを加えて次の 6 点が見つかった。同時に、19 世紀に上演に使われた脚本はほぼ Garrick 版だということもわかった。

- (1) *Every Man in His Humour in The Plays of David Garrick*, vol. 6: *Garrick's Alterations of Others*. Edited with commentary and notes by Harry William Pedicord and Fredrick Louis Bergmann (Carbondale: Southern Illinois UP, 1982).
- (2) *Every Man in His Humour in The Plays of David Garrick*, vol. 3. Edited with introduction by Gerald Berkowitz (NY: Garland Publishing Inc., 1981).
- (3) *Every Man in His Humour in The Bell's British Theatre, 1776-1781*, vol. 2 [1776].
- (4) *Every Man in His Humour in British Theatre*, vol. 5 [1808].
- (5) *Every Man in His Humour in London Stage*, vol. 3 [1824-1827].

(6) *Every Man in His Humour in British Drama Illustrated*, vol. 4  
[1864-1872].

これらのうち、(1), (2)は Garrick が改変したテキストをそのまま掲載、(3)は Drury Lane で上演した際に劇場側で一部省略した部分を ‘……’ で括って示しており、(4), (5), (6) はその括った部分の削除に加えて、長いスピーチを短縮したり間のびのする箇所を削るなどの工夫を施している。最も削除の多い脚本は(4)である。

そもそも Garrick 版とはどのようなものか、オリジナルのフォリオ版に基づくテキスト (New Mermaids 版および Oxford/Yale 版) と照らし合わせながら、それぞれどこが異なっているかを確かめるために、次の一覧表を作成した。

Garrick 版と Folio 版との構成上の違いはその表から、また言葉や表現の書き換え、あるいは削除の詳細は、Noyes (258-264) および Pedicord & Bergmann (368-371) より確認するとして、ここではギャリック版の特徴を次の 4 点にまとめておきたい。

1. 廃れて使われなくなった言葉や表現は削除し、また、エリザベス朝の話し言葉は 18 世紀の観客に理解できるよう当世風に書きかえる。
2. 構成上の変更。作品の興味の中心をロンドン商人 Kitely の嫉妬におき、劇的エネルギーの拡散を防ぐとともに、プロットの進行を遅らせる箇所はこれをすべて除去する。
3. 作品全体の場面数を 33 から 16 に縮小し、加えて Cob (水運び

人)の低俗趣味を扱う3場面(III, 4; III, 7; IV, 4)はすべて削除し、作品中における彼の役割も減じる。とりわけ第4幕では場面数を8から3に大幅カットし、残る3場面を第5幕に繰り入れる

Folio 版(1616)に基づくテキストと Garrick 版との比較

New Mermaids series (1998)	Oxford/Yale Ben Jonson edition (1927; 1969)	Garrick's version (London Stage, 1821-1827)
Act I		
Scene 1	1 [Outside Knowell's House] 2	1 Court yard before Knowell's House
2	3 [In Knowell's House]	2 Young Knowell's Study
3	4 [The Street before Cob's House]	3 The Street before Cob's House
4	5 [Bobadilla's Room]	4 A Room in Cob's House
Act II		
Scene 1	1 [Before Kitley's House] 2 3	1 A Warehouse belonging to Kitley
2	4 [Moorfields]	2 Moorfields*
3	5 [Moorfields]	
Act III		
Scene 1	1 [A Street] 2	1 Stocks market
2	3 [In Kitley's Warehouse] 4 5	2 The Warehouse
3	6 [In Justice Clement's House] 7	3 A Hall in Justice Clement's House
Act IV		
Scene 1	1 [A Room in Kitley's House] 2 3	1 A Room in Kitley's House
2	4 [Outside Cob's House]	
3	5 [A Street]	2 Moorfields*
4	6 [The Street near Justice Clement's House]	
5	7 [A Street]	
6	8 [A Room in Kitley's House]	3 A Chamber in Kitley's House*
7	9 [A Street]	Act V 1 Stocks market
8	10 [Outside Cob's House]	2 The Street before Cob's House
9	11 [A Street]	3 Stocks market
Act V		
Scene 1	1 [A Room in Justice Clement's House] 2 3 4 5	4 A Hall in Justice Clement's House**

New Mermaids 版および Oxford/Yale 版には場面タイトルがなく、編者が便宜上 [ ] 内にそれを補っている。

\* (IV, 3) : The first 200 lines are the extensive revisions of Garrick; the last 9 lines are Garrick's additions.

\*\* (V, 4) : Scenes 3-5 (in Oxford / Yale edition) are much reduced and revised, with scene 4 entirely omitted, to an effective conclusion.

ことによって舞台セットの入替えを2回で済ませ、また場面替えの円滑化をはかる。

4. IV 幕 3 場の大幅な書き換え。自分の留守の間に若き新妻が店に出入りする伊達者に誘われはしないかと心配する商人 Kitely の嫉妬心を病的なまでに高じさせるとともに、複数の場面を連続して舞台上に留めることによって、芝居の中心がどこにあるかを観客に悟らせる。

Garrick は以上の改変を施して Jonson 喜劇を 18 世紀の洗練された観客に演じてみせた。それは大成功を収め、*Every Man in His Humour* は書かれてのち 150 年たって劇的に甦ったのである。

### 3. Garrick による Jonson 喜劇の復活と成功

David Garrick は 3 年にわたって研究を重ね、Jonson 劇に欠けているプロットを明瞭に設定するとともに、部分的な削除あるいは加筆を施して、1751 年 11 月 29 日、この喜劇を上演した。作品の中心には嫉妬に身を焦がすロンドン商人を据え、Garrick 自身が商人 Kitely を演じた。喜劇は大評判をとり、初シーズンの 1751-52 は 16 晚上演し、最初の 3 晩で収入は £ 200、シーズン全体で £ 2,980 を手にした (Pediccode & Bergmann 366)。その成功ゆえに、この喜劇は Garrick が引退するまで Drury Lane のレパトリーの一つとなった。グランド・ツアーに出かけた 2 シーズン [1763-64; 1764-65]、およびドルアリー

劇場の演目から外れた 1766-67 年は例外として、22 シーズンにわたり、1~7 回とばらつきはあるものの彼は欠かすことなくこれを上演しつづけた。彼は一貫して Kitely 役を演じ、引退するまでの 25 年間 (1751-1775) に計 81 回演じている (うち 4 回は天覧公演、10 回は彼自身の特別報酬となる公演)。

この成功は、一つには Garrick の配役・采配・演出の巧みさによるが、大部分は Kitely を演じる Garrick の演技力と Bobadil を演じる Henry Woodward (1714-77) の創意と工夫を凝らした名演ぶりによるものであった。他の登場人物は入れ代わりがあったが、この二人だけは代わることなく自分の役に留まりつづけ、18 世紀後半にこの喜劇の人気を生み出す一大原因をなした。Garrick はさておき、Woodward は 9 シーズン (1751.11~1759.3.31) にわたって Bobadil を演じつづけ、“a favourite of the town” (Noyes 271) となる。*Every Man in His Humour* の大成功も、Bobadil を演じるすぐれた喜劇役者に恵まれたことに大きな一因があったようだ。

ライバル劇場である Covent Garden はこの成功を黙って見てはいなかった。まずは Woodward の引き抜きにかかり、1762 年に移籍がきまるとその年の 10 月 25 日、Kitely 役を William Smith (1730-1819) に、Bobadil 役を Woodward にあてて、*Every Man in His Humour* を初演し、そのシーズン中に計 16 回の上演を行っている (Pediccode & Bergmann 365)。Garrick が大陸旅行に出かけた 2 シーズン (1763-64; 1764-65) には、Drury Lane に上演予定のないのがわかると (Drury Lane では敢えて Garrick に挑む役者はいなかった)、彼の留守を利用してこの間に 15 回の上演。Drury Lane の演目から外れた 1765-66 年には 7 回、1766-67

年には9回と、毎年上演を続け、1762年の初演から数えて、GarrickのDrury Lane経営期間中(1751-76)に、計74回の上演を行っている。ちなみにWoodwardがBobadilを最後に演じたのは1774年1月21日、彼は生涯で計131回(Herford & Simpson 9: 176; Noyes 270)これを演じた。BobadilといえばWoodward、WoodwardといえばBobadilといわれるほど、彼の名声は定着した。ちなみに*Bell's British Theatre*に収録された*Every Man in His Humour*の扉絵には、Woodwardの扮するBobadilが掲載されている。

一方、William Smithは、GarrickのライバルとしてCovent Gardenで11年間Kitelyを演じたものの、これといった美名を残すことはなかった。また1774年には、乞われてDrury LaneでRichard IIIを演じ、その時から1788年に至るまでDrury Laneに籍を置いた。Garrickの最終シーズンではGarrickの代役(1775.10.5)も勤めたが、さほど目立った成功を収めるには至らない。それでも、1778-1788の10年間に*Every Man in His Humour*を16回上演している(逆にWilliam Smithを失ったCovent Gardenでは、この間、上演は1回きり)。そして、Smithの最後の上演(1788.5.23)を契機に、この喜劇は以後10年にわたりレパートリーから消える。その後は散発的に演じられることがあっても(たとえば1816年のEdmund Kean [1789-1833]によるKitely [at Drury Lane]; 1825のCharles Young [1777-1856]によるKitely [at Covent Garden])、すでにこの喜劇は死に絶えたも同然となっていた。

## 4. Dickens の素人劇団による上演

Dickens は 1845 年 7 月、一年間のイタリア滞在から帰国するやいなや文人・友人を誘ってアマチュア劇団を結成し、その最初の上演演目に Ben Jonson の *Every Man in His Humour* を選んだ。何故この作品を選んだのかは推測によらざるをえないが、彼は 1837 年 1 月に高名なギャリック・クラブの会員に選ばれており（1831 年創設の作家、俳優、音楽家、出版業者で作る社交クラブ。24 人の貴族が名を連ね、Macready も会員）、Garrick の声望と活躍の数々に通暁しているのはもちろん、Ben Jonson の喜劇が彼の手によって劇的な復活を遂げたことも知っていたであろう。また、19 世紀に *Every Man in His Humour* は死に絶えたも同然であるとはいえ、敬愛する Macready がこれを演じているのである。一度は地方巡業中の 1816 年 2 月 10 日に Bath で、次いで 1832 年、そして 1838 年 7 月 29 日には Haymarket で上演している。いずれも総じて不評ではあったものの、Macready の演じる Kately だけは高い評価をうけている。ただし彼自身、この喜劇についてはかなり否定的である。彼はこう評している。

...With humours admirably sketched and most happily contrasted, the play will never hold its place on the stage. There can scarcely be found a company of players to adequately fill the various parts; and if there were by chance such combination, their best efforts could not long give life to a drama that is totally devoid of action.' (Pollock I:106)

登場人物の癖はそれぞれ絶妙に、しかも実によく対照をなして描かれているものの、作品は決して演劇界に名を留めることにはならないであろう。これだけのさまざまな役を十分にこなせる役者が劇団にそろっていないければならず、またアクションが全くないドラマなので、役者がいくら努力しても芝居を面白くすることはできないというのである。

Macready が難しいというのであれば、挑戦してみたいと Dickens が考えても不思議ではない。*Every Man in His Humour* は Kitely と Bobadil で持っている。どちらか一方だけが秀でて、芝居としての成功はありえない。喜劇人物を演じることを大の得意とする Dickens は、もちろん Bobadil を演じる。Jonson の人物造形はまるで Dickens のそれと同じであるかのように、いとも自然に演じることができるのだ。彼にはそれが直感でわかる。だからこそかつての喜劇役者 Woodward に引けを取らぬ演技をやってみせる自負もある。また友人 Forster は 1832 年より演劇評論家として *True Sun* や *Examiner* の演劇欄を担当している。Kitely は彼にまかせて大丈夫だ。Douglas Jerrold (1803-1857) は *Punch* の編集室から Mark Lemon (1809-1870) を引き連れて参加した。編集長である Lemon は、劇作家でもあれば優れた素人役者でもあり、せりふなどはアドリブまで添えて自在にこなす生来の演劇人。彼は Brainworm。以後、二人の信頼関係は急速に深まり、急ぎ笑劇を組み入れねばならぬ時など “I confess I have a fear of a farce without either you or me in it.” (Letter to Mark Lemon, 4 July 1847; *Letters* 5: 116) と述べて共演を頼んでいる。友人間の強固な人間関係によって劇団はみるみるうちに結成され、配役は決まり、リハーサルを経て

上演にこぎつける。そして、先に述べたように、短期間に結成された素人劇団は初めての上演で大成功を収めるのである。

Dickens 劇団初上演の 9 月 20 日、Macready はボックス席で苦しそうな表情を浮かべてこれを見ていたが、終わった後で開かれた晩餐会の席上、体調を崩して退席する。うがった見方をすれば、素人がこれほどうまく演じることに對するショックと不快によるものであったというが(Downer, 2779)、本当のところは病だったそうだと (Burton 175-76; *Letters* 4:390n)。この日の Macready の日記にはまぎれもなく Brainworm と Bobadil がとりわけすばらしかつたと記している (Adrian 121)。しかしこのような推量をさせること自体、Dickens の演技および全体を束ねる演出がいかに秀逸であったかを証して余りあろう。以後、初回を含めて全 9 回の興行をこの劇団は大盛況のうちにやっつける。その華々しい興行のキャストは次のようになっている。

	At Miss Kelly's Theatre Sept. 20, 1845.	At the Theatre Royal Manchester July 26, 1847.	At the Haymarket May 17, 1848.	At Knebworth, Nov. 18, 19, 20, 1850
<i>Knowell</i>	Henry Mayhew	G. H. Lewes	Dudley Costello	Delmé Radcliffe.
<i>Edward Knowell</i>	Fred. Dickens	Fred. Dickens	Fred. Dickens	Henry Hawkins.
<i>Brainworm</i>	Mark Lemon	Mark Lemon	Mark Lemon	Mark Lemon
<i>Downright</i>	Dudley Costello	Frank Stone	Frank Stone	Frank Stone
<i>Wellbred</i>	T. J. Thompson	T. J. Thompson	G. H. Lewes	Henry Hale
<i>Kitely</i>	John Forster	John Forster	John Forster	John Forster
<i>Capt. Bobadil</i>	Charles Dickens	Charles Dickens	Charles Dickens	Charles Dickens
<i>Master Stephen</i>	Douglas Jerrold	Douglas Jerrold	Aug. Egg	Douglas Jerrold
<i>Master Mathew</i>	John Leech	John Leech	John Leech	John Leech
<i>Thos. Cash</i>	Aug. Dickens	Aug. Dickens	Aug. Dickens	Fred. Dickens
<i>Oliver Cob</i>	Percival Leigh	Aug. Egg	George Cruikshank	Aug. Egg
<i>Justice Clement</i>	Frank Stone	Dudley Costello	Willmott	Hon. Eliot Yorke
<i>Roger Formal</i>	F. Mullet Evans	G. Cruikshank	Mr. Eaton	Mr. Phantom
<i>William</i>	G. A. a'Beckett	omitted	omitted	omitted
<i>James</i>	Jerrold, Jr.	omitted	omitted	omitted
<i>Dame Kitely</i>	Miss Fortescue	E. Montague	Miss Fortescue	Miss Anne Romer
<i>Mistress Bridget</i>	Miss Hinton	Mrs. A. Wigan	Miss Kenworthy	Miss Hogarth.
<i>Tib</i>	Miss Bew	Mrs. Caulfield	Mrs. Cowden Clarke	Mrs. Mark Lemon

From *Charles Dickens by Pen & Pencil*, 108

座長であるディケンズの上演準備と演出については、Forster の手になる『ディケンズ伝』が事実を最も忠実に伝えている。

He was the life and soul of the entire affair. I never seemed till then, to have known his business capabilities. He took everything on himself, and did the whole of it without an effort. He was stage-director, very often stage-carpenter, scene arranger, property-man, prompter, and bandmaster. Without offending any one he kept every one in order. For all he had useful suggestions, and the dullest of clays under his potter's hand were transformed into little bits of porcelain. He adjusted scenes, assisted carpenters, invented costumes, devised playbills, wrote out calls, and enforced as well as exhibited in his proper person everything of which he urged the necessity on others. Such a chaos of dirt, confusion, and noise, as the little theatre was the day we entered it, and such a cosmos as he made it of cleanliness, order, and silence, before the rehearsals were over!

(Forster 383)

かつてモントリオールで駐屯部隊士官の素人劇団を率いて上演したときと同じく、彼は上演までの道のりをすべて自分でやってのける。いや、そうしなければ気がすまないのだ。戯曲の選定、プログラムの作成、着付け、演技指導にはじまり、舞台の点検、手直し、大工仕事、つづいて演出、リハーサル、本番と、あらゆることに全力を投じて準備する。どんな些細なことをも見落とさぬ、精力的かつ自信にあふれ

るディケンズの姿が活写されている。

1845年、*Every Man in His Humour* のキャストが決まると、Forster はすぐ Kitley の役割研究に没頭し、せりふ部分への書き込み、登場の際の注意書、心中の疑念や落ち着きのなさが声や表情に顕れるように日常生活においてもこれを実践するといった、周到な準備に明け暮れる。また Macready に指導もお願いしているし、衣装についても彼より詳しい助言をもらっている。多分に Forster は 1838 年に Macready が演じた Kitley を見てそれが強烈に脳裏に残っていたのか、彼の Kitley は Macready の再現であったようである (Burton 172-184)。演出者の Dickens は練習中に Forster の身勝手な解釈をいさめたが、彼はまったく聞き入れようとはしない。かくして「嫉妬にさいなまれる悲劇の主人公」ともいうべき人物ができあがった。Macready は、これは間違いだと指摘している (*Letters* 4:390n)。

その、やや重い感じのする Kitley に対して、Dickens は Captain Bobadil の臆病さやほら話をおもしろおかしく奔放に演じ、軽快さをもたらし爆笑を引き起こす。その結果、芝居は実にうまく釣合を保つ。

たとえば、Bobadil は一文無し安宿暮らしの境遇を上手くカモフラージュして、「私は世間を避けて一人暮らしをしている紳士だ。ここに住んでいることを人には知られたくないし、訪ねてほしくないのだ」(I, 4) と来訪者に告げたり、またある時はいかにも生活に窮した兵士のなりをして自分の剣を Toledo 製だといって高く売りつけ、別の場面では Strigonium (Hungary) の包囲戦の折、わが軍は自分を先頭に切り込み、わずか 2 時間で敵の精兵 700 人をこの剣で切り殺したのだと語り、「ホラ見ろ、刃こぼれ一つない。これは慎ましい紳士の腰につ

るされた最も幸せな武器だ——これは完璧な Toledo 製だ」と誇らしそうに眺める。すると以前にある兵士から剣を買った相手は「私のも Toledo 製だ」と自慢そうに見せる。Bobadil はこれを手に取るや、「これが Toledo 製？ フン」といって剣を二つ折りに曲げ、「安物の Fleming 製だ。1 本 1 ギルダ (= 3s. 4d) なら買ってやってもいいな、それもまとめて 1,000 本買いたいと思えばの話だ」(III, 1)、と軽蔑もあらわに一蹴する。そして最後にこんな強がりを使う。もし自分に 19 名の精悍な紳士をあてがってくれば、国家の年間戦費を半分またはそれ以上削減してみせる。まずは連中に特別訓練を施し、たとえ敵が 4 万であろうと必ずこれを滅ぼしてみせる。どうするか、その手始めとしてまず敵兵 20 名に戦いを挑み、これを皆殺しにする。さらに 20 名に挑戦、殺戮。かくして 1 日に各々が 20 名を殺戮。さすれば 20 score、これは  $20 \times 20 = 200$ 、つまり 1 日 200 人、5 日で 1,000 人。4 万は 5(日)分の 40 倍、 $40 \times 5 = 200$ 、200 日で敵は殲滅できる、と得意の算術に間違いなどありえないとばかり、鼻高々披露する (III, 1)。

Dickens の演じる Bobadil をじかに目にした Mary Cowden Clarke は、興奮しかつその天分豊かな演技を絶賛して次のように記している。観劇記録のほとんどないなかで Dickens の素人演劇活動を考察するには、彼女の回想記ほど貴重な資料はない。Dickens and the Stage の著者 Pemberton も、あちこちでこの回想記を引用する。

The way in which Charles Dickens impersonated that arch braggart, Captain Bobadil, was a veritable piece of genius: from the moment when he is discovered lolling at full length on a bench in his

lodging, calling for a “cup o’ small beer” to cool down the remnants of excitement from last night’s carouse with a set of roaring gallants, till his final boast of having “not so much as once offered to resist” the “coarse fellow” who set upon him in the open streets, he was capital. The mode in which he went to the back of the stage before he made his exit from the first scene of Act ii., uttering the last word of the taunt he flings at Downright with a bawl of stentorian loudness—“Scavenger!” and then darted off the stage at full speed; the insolent scorn of his exclamation, This a Toledo? pish!” bending the sword into a curve as he spoke; the swaggering assumption of ease with which he leaned on the shoulder of his interlocutor, puffing away his tobacco smoke and puffing it off as “your right Trinidado;” the grand impudence of his lying when explaining how he would despatch scores of the enemy,— “challenge twenty more, kill them; twenty more, kill them; twenty more, kill them too;” ending by “twenty score, that’s two hundred; two hundred a day, five days a thousand; forty thousand; forty times five, five times forty, two hundred days kills them all up by computation,” rattling the words off while making an invisible sum of addition in the air, and scoring it conclusively with an invisible line underneath, —were all the very height of fun. (Clarke 310-11)

*The Times* (22 September 1845) 対Forster, Dickens, Leech, Jerrold,

Lemon の演技を褒め、*The Illustrated London News* (22 November 1845) もまた“The play could not have been so *intelligently* performed by any dramatic company now in London.” (*ILN* 7: 329) と述べ、当時の衣装を身につけたForster, Dickens, Leech, Jerrold, Lemon, Mayhewのスケッチを載せている (*ibid.*, 329, 348)。中でもDickensの評価はとりわけ高く、“Mr. Dickens’s *Bobadil* was the best impersonation of the night, and a performance of a very high merit, even if measured by a technical standard.” (*ibid.*, 329) と絶賛を送っている。Forsterもまた初回の成功を興奮気味にこう記している。

“...with a success that out-ran the wildest expectation; and turned our little enterprise into one of the great sensations of the day. The applause of the theatre found so loud an echo in the press, that for the time nothing else was talked about in private circles...” (Forster 382-3)

しかしそれ以上にDickens が演出の才を見せるのは、プログラムの編成にある。主演目の後に短い笑劇 *A Good Night's Rest* を添え、これをDickensとLemonが面白おかしく演じて劇場を爆笑で包み込むのである。Jonsonの喜劇に限らず、別の機会に主演目をBulwer-LyttonやWilkie Collinsの作品に変えて慈善興行をおこなう時も、必ず笑劇や幕間劇を加えて観客を楽しませるのがDickensの変わらぬプログラム編成方針であった。彼は著名な作家であると同時に、ずば抜けた俳優、舞台監督、そして演出家でもあった。

## 5. 演劇活動のあとに

Dickens は何故かくも衝動的に素人劇団を結成したのか、ということについていまだ少し考えて見たい。

彼は自信をもって6番目の長編小説 *Martin Chuzzlewit* (1843.1-1844.7) を世に送ったが、売れ行きははかばかしくなく、初回分冊より最終分冊にいたるまでほぼ2万部にしか届かなかった。*Nicholas* は5万部、*The Old Curiosity Shop* などはNellの死期がせまると10万部に達したのに比べて、新作の販売部数は期待を大きくはずれ、Dickensは読者に見放されたと考えて苦しむ。小説はよく売れてもせいぜい1,000部止まりという時代にあつて、2万部も売れば超幸運児として羨望の目で見られたはずであるが、以前は「天文学的」な売り上げを記録していただけに、Dickensの衝撃は大きかった。以後2年間、彼は長編執筆に取り掛かっていない。生涯で最も長い長編執筆不在の時期を過ごすのである。

*Martin Chuzzlewit*の最終号を書き終えると、彼はすぐさま1年間のイタリア滞在に踏み切り、かの地で雑誌刊行に思いをめぐらしたり、短編のクリスマス読本を手がけている。しかし読者がなぜ自分を見限ったのか、その理由を見出すことはできなかった。イタリアから帰国したときには、『タイムズ紙』と張り合って日刊新聞を創刊する計画をも進めていた。まずBradbury & Evans社を説いて、スタッフ集めには出費を惜しまないことを約束させ、副編集長として W. H. Wills (1810-80) を *Chambers's Edinburgh Journal* から引き抜き、さまざまな部門には著名な記者、リポータ

一を配し、また欧州、中東、インドの特派員をさだめた (Schlicke 143)。知名度の高さとかつてのジャーナリズムの経験からこの類の仕事には惜しみなく時間と労力を注ぎ、引き入れた著名人は目を見張るばかりである (*Letters* 4: 411n)。そして年俵を倍の2,000ポンド (*Times*を除く新聞社の2倍の年俵) に引き上げて初代編集長に就くのが11月3日、『デイリー・ニューズ紙』の主眼を革新的政治風土の形成と文化の発展に置くことを掲げた。1846年1月21日の創刊号では、穀物条例撤廃に賛成するピールの演説を新参の新聞が『タイムズ紙』に先んじて掲載するという離れ業すらやっつてのけた。これは株主のSir Joseph Paxton (1801-65) がGeorge Hudson (1800-1871) に特別列車を仕立てさせて記事を運ばせたからできたのであったが、『タイムズ紙』の側では歯軋りして悔しがったそうである。そしてこの「早さ」は、長い間語り継がれたという (*Letters* 4: 472n)。ところが残念なことに、植字工が未熟だったため誤字脱字が多く、翌日には編集長の「お詫び」を出さねばならぬ始末となった。また、新聞はいつの間にか株主の要請によって自由貿易と鉄道関連の記事で埋め尽くされ、編集長の思惑通りにならないことも重なり (Adrian 111)、3週間後、彼は編集長の座をForsterに譲る (2月9日)。そして新聞と手を切るため彼はロンドンを離れ、前年イタリアから帰って来るとき目にしたスイスの山々を思い出し、ローザンヌに移り住んで新しい小説に集中することにした。

衝動的に劇団を結成し、*Every Man in His Humour* を上演したのは9月20日。その頃は『デイリー・ニューズ紙』創設に奔走する一

方で、12月に出すクリスマス読本 *The Cricket on the Hearth* の構想にずいぶん苦しんでいた。クリスマス哲学を唱道するにふさわしいプロットを思いつかないのである。10月には第6子も誕生する予定。加えて長編小説のめどは全く立っていない。様々な事柄に身を投じながらも、肝心の執筆活動においては何一つ解決の糸口は見えず、時の過ぎ行くのを前に、もどかしさ、焦燥、苛立ちにさいなまれ続ける。一時的にはあれ、全く関係のない異質なものに自己を投入することによってそれらをすべて忘れ去り、ふたたび新たな気持ちで創作に立ち向かう必要を覚えたのであろうか。

普通の人にとって、書くことと演じることは、全く別ものである。しかしDickensの場合、その双方に豊かな天分を賦与されていて、二つの異なる行為がしばしば同化したり、あるいは補完しあっていることは注目に値する。例えば、執筆中に突然立ち上がり鏡の前で顔を歪めたり引きつらせたかと思うと急ぎ机に戻ってその表情を書き止め、執筆中の人物像を完成することはよく知られたエピソードである (Collins I: 121-22)。双方は対立概念ではなく、相補う関係を有している。小説執筆に行き詰まると、彼はたとえば演劇活動といった別世界に己のすべてを投入し、その完遂に向けて脇目も振らず集中する。そして、おのれを燃焼しきったとき、そこに不思議な相乗効果が生まれてくる。演劇活動の影響が今取り組んでいる作品の中に形となって現われてくる。別世界の余波が小説の行き詰まりに新たな展望をもたらす。

ShakespeareがJonson喜劇を読んで演じた1598年には、場面も人物もイタリア名に設定されていて、KitelyはThorello、新妻はBianca

であった(1601年刊、quarto版)。その数年後、彼は*Othello*を生み出している(1604)。Dickensの場合も、演じたことによって、このJonson喜劇の嫉妬による家庭内不和がいつしか*The Cricket*のプロットを形成している。妻の不義を内密に告げられた主人は、妻に対する信頼と疑念の間に悶々と苦しみ、一時は恋敵を射殺しようとして心を決めるが、最後にはすべては誤解であったことが判明し、平穏な家庭生活が舞い戻るのである。1845年12月20日、このクリスマス読本は無事出版にこぎつけ好評を博した。また、Jonson喜劇の上演は驚くほどの成功を重ね、Dickensは俳優兼演出家として歴史に名を刻む。そしてまた、*Martin Chuzzlewit*の不評は、1846年10月に月刊分冊の初号が出る*Dombey and Son* (1846.10-1848.4)の高い売れ行きによって一掃される。Dickensは*Every Man in His Humour*を上演することによって、人間の内面分析を試みる新たな領域に小説の可能性を見出し、円熟期を画する大作を生み出したのである。

Dickensの演劇活動と小説執筆のかかわりは、これだけでは終わらない。以後、とりわけWilkie Collins (1824-89)の書いた*The Lighthouse* (1855) および*The Frozen Deep* (1857)の上演は、*Little Dorrit* (1855.12-1857.6) および*A Tale of Two Cities* (1859.4.30-1859.11.26)の構想に大きな影響を及ぼし、Dickensに新たな人間研究を促す興味深いエピソードを提供するのである。

## Bibliography

## 1. Ben Jonson's Text (based on Folio of 1616):

*Every Man in His Humour*, edited by Robert N. Watson. 2nd ed. London: A. & C. Black, 1998 (The New Mermaids series).

*Every Man in His Humour*, edited by Gabriele Bernhard Jackson. Yale UP, 1969 (The Yale Ben Jonson).

*A tale of a Tub; The Case is Altered; Every Man in His Humour; Every Man out of His Humour*. Reissued with corrections. Edited by C.H. Herford and Percy Simpson. Oxford: Clarendon Press, 1986. (*Ben Jonson*, vol. 3).

## 2. Text altered by David Garrick:

*Every Man in His Humour* in *The Plays of David Garrick*, vol. 6: *Garrick's Alterations of Others*, edited with commentary and notes by Harry William Pedicord and Fredrick Louis Bergmann (Carbondale: Southern Illinois UP, 1982).

*Every Man in His Humour* in *The Plays of David Garrick*, vol. 3. Edited with introduction by Gerald Berkowitz (NY: Garland Publishing Inc., 1981).

*Every Man in His Humour. The Bell's British Theatre, 1776-1781*, vol. 2. Repr. AMS: 1977.

*Every Man in His Humour. British Theatre*, vol. 5 [1808]. Ed. Elizabeth Inchbald. Hildesheim: Olms, 1970.

*Every Man in His Humour. London Stage*, vol. 3. London: Sherwood, Jones, & Co., 1824-1827.

*Every Man in His Humour. British Drama Illustrated*, vol. 4. London: John Dicks, 1865.

## 3. Works Cited:

Adrian, Arther A. *Mark Lemon: First Editor of Punch*. London: Oxford UP, 1966.

Burton, Anthony. "Forster on the Stage." *Dickensian* 70 (1974): 171-184.

Clarke, Charles, and Mary Cowden. *Recollections of Writers*. Reprint of the 2nd ed. Originally published: London: Sampson, Low, Marston, Searle & Rivington, 1878.

- Collins, Philip, ed. *Dickens: Interviews and Recollections*. 2 vols. London: Macmillan, 1981.
- Dexter, Walter. "For One Night Only: Dickens's Appearances as an Amateur Actor, VIII-X." *Dickensian* 36 (1940): 90-102.
- Downer, Alan S. *The Eminent Tragedian: William Charles Macready*. Cambridge: Harvard UP, 1966.
- Forster, John. *The life of Charles Dickens*. Ed. J. W. T. Ley. London: Cecil Palmer, 1928.
- House, Madeline, et al. eds. *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Oxford: Clarendon Press, 1965-2002.
- Illustrated London News* 7 [July-Dec., 1845], Tokyo: Kashiwashobo, 1997.
- Jensen, Ejner J. *Ben Jonson's Comedies on the Modern Stage*. Ann Arbor, Michigan: UMI research Press, 1985.
- Johnson, Edger. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. 2 vols. London: Victor Gollancz, 1953.
- Kitton, Frederic G. *Charles Dickens by Pen and Pencil*. London: Frank T. Sabin, 1889.
- Noyes, Robert Gale. *Ben Jonson on the English Stage, 1660-1776*. Cambridge: Harvard UP, 1935.
- Pedicord, Harry William, and Fredrick Louis Bergmann, eds. *The Plays of David Garrick*, vol. 6: *Garrick's Alterations of Others*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1982.
- Pemberton, T. E. *Dickens and the Stage*. London: George Redway, 1888.
- Pollock, Fred, ed. *Macready's Reminiscences, and Selections from His Diaries and Letters*. 2vols. London: Macmillan, 1875.
- Schlicke, Paul, ed. *The Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. New Haven: Yale UP, 2009.
- Watson, Robert N. "Introduction" to *Every Man in His Humour*. London: A & C Black, 1998.